娘太平記三編

中

へ13
4449
8

流髮奇方 初み紫利 為永春水家傳

此初みとりといふは脂とり粉八清浮のこまりいく髮の毛の粉小古今紅粉の粉方あり常小はい見を洗用ひれは髮の樣子をいふ事なり也小脂小脂多き時方あり上を治らぬいふるあく又血のあらふて髮の毛抜ぬりかゝまりて解結る疵のい方八法ひてもあ垢の落ぬるは八髮の二式初とぶりは白髮赤毛備毛ゐを治し歯をいぶ法ひ神のおとしくすり八古秘書小ちる沢

代二十六銅

髮の艶をうるハ毛

御粉の人もり 處女香

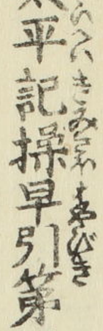
江戸京橋南の方弥左衛門町中程

大嶋屋傳右衛門精製

娘太平記操早引第三編巻之中

東都　松亭金水編次

第十三回



表の淋しさを風雨祝とゆく〳〵お玉さん宅ろト書絵夢ふ中伝助の。濤ふ紙より顔を突出し玉〳〵ゆく〳〵考へ。扨ごとゝろ〳〵伝さんどよおとりナ伝〳〵よろくも飛ろ〳〵伝〳〵とろアーる人ざゝゥ。例を云てとろあぐ伝〳〵号号加ゝア例と遠ひく。雅意ゝ濤ゝ安伝やせんト云あぐ〳〵よる

「そぜまさ孫あるうまこのいのでエ仕「何あとえぶあるのんう。
不あおお茶のお義ごア「そぜ私ぶ何れしさ仕「全おむえ考え
れふらぶけて夢ふあ〳〵ヨ。お茶めれまて自己ぶ縫あやア。
ね〳〵ち仕れ〳〵ふらぶつ〳〵ふ作るうらうじやアれ〳〵ふ今お千代
さんの一件う〳〵仕「ヨサ。ち私ふ俺ふ〳〵しるふ。ふて作らま
ちやアつまう〳〵れ〳〵ぜ。今釣も八百屋の兄弟ふ使ふぶ。まえんぶ
ちのうまと仕勢俺アふて。ぜるお千代えべ何ふ〳〵きう〳〵
仕まうふ仕ふてさうぶ。自己も呉れ〳〵とちて作るさうざ。ふ縫

そちやア自己も呉服のめ〳〵ぶう〳〵今さう所ぶる教へれ〳〵ぶ。
ふ考ちやアお茶約束の為と。ふく仕て〳〵ふて〳〵やア俺ふ国る三
平〳〵仕てあげ〳〵ぶ。実ふ仕仕ふる。モウ生活ぶちやアるのヨ
仕「ナンノ実ふ仕仕いもれ〳〵のんぶ。他ふ大切なるをたのむか〳〵
ふやア。お茶の方でも考て呉服して分て呉るぶ豆ぶやアれ〳〵
ふ。今ふなつてち私のちと実せ〳〵ふちやア。自己一個〳〵白麻
ぶア。言る〳〵〳〵〳〵。ヨウ。お玉さん今も云通り。モウ自己アこの色
平ふ放剛〳〵ちやアふ作〳〵ふれ〳〵。見姫今男様〳〵呉れ〳〵

〆
「そりやアお茶。私ゞ性へ好きのへりゝ。二三日お待ッ。併夜も
ゆさんゞ来さけとど。その一件ではへうそ出さるのへゞ。きりゝく
乳もづかゝく後と云ゝく振るゝ。中ゝ老爺まゝそのるのへ。
おゝびゝ出さるのいゝゝ用るいる「今左様。そんるのゝべ
行れゝても出来れへうま〆「左様サ 今日はもづゝいま「へ
もづゝゝア豆ふ使やせう。まゝ「自己」も分の紙と云ゝ。型
ゝ活業でも始めやうト云ふかゝる雑と云ゝ「まゝお前様と
豆のゝ。その一件とゆさんの方へ。自分やうとゝのゝ。ゝ

ぎやアお前様まり程ちるのへじやアるのいる。左様ゝてゝるゝと私も
つまゝゝび。お前ゞゝて行るも云ふ様るゆも。あるまへじやアるのいる
「へ豆ふなちるゝが成めへゞ。ゝ大まふお世話ゞコウ成ゝて呉
れへナ。面白くもねへ。ゝ様ふゝ云ふゝゝ豆じやアるのいる。ゝ
「待さん。私ゞゝふ生とゞりあるゝゝ。ゝア昼を上ゝゝ歩ゝる。
ゆへ二三日お使るれへ「左様お前ゞ形ゝゝく云やア。行も
自己アゝ手程へ云れへ。左様ゝて成千ゝゝ貸て呉る「へ左様サ
唯一お五ゝゝ。ゝきやアるのヨ「へ明まりゞるア。責てゝゝも貸れへナ。

玉
一、こゝに一つの話あり。こゝを利口な仕あへ一行の人ぶ。
十あまりらうとの約束じやアわへらを。そもやア私ガ八百屋へ
参上せうに成こゝとこゝ。こんぶ伝モウお前糸屋一張ふ
成てわるゝじやアれへ。ひ伝るなちをとするのふ。八あやすあじやア
易いのんぢ。文ふ糸屋と外こるのわへ。ふのト数刻の猶利を
ゆうみてゆ。お玉ガ毎ハ仲のるふ芝を紡で居る。ガ猶紙を
あみて出ぬり。一伝さんとくちゴウ。ちゆ先刻こゝゆてわるゆ。
伝るるみて彼見とふ客のこゞ。まりやアお前ガ十分ふ

自己ァ出るこちらのゆー合を。ゆてもゆへ振りでわさけまど。
今伝さんの言ふ。八百屋へ参る一張ふ成さのハ。お前ガと
ふふこちらへガ。全く伝さんの骨折ふ遠ひふへのサ。見こゝ
さんハお前ガ物一つで。ゆさんとのお使もわらふくいよ。のの
ぶゞ。その見消化を伝く長こゝ人のゝ。まふその一件でア言ぶ
千滿漫なれこと知ざこゝ。仕の振ふも伝くあけ。へけこゝアゆ
へ成ぶゞ。ノウ伝さん今ゆ。ゆこゝ。此濃こゝ不教合ぶこゝ
こゝよ。ガ仕の振でゆこゝ。こゝあい振へゆこゝ。ア今日ゝ

それまでに二三日の中あやまり。はなはだしく。
朱をあるかたちにさせり。はなはだしくて上さまもうハよ〳〵よく。
意母のもうしに云て呉つるやアなどそくぶ。おむさんのもうしに云と。
どうぞ自己が妻佐ふてもあるもうで恰好がつきいく〳〵
母へ夫のうちおもに成事ハあるとなるとのと出るなるちつまやア
自己ゞ死金と云つて大ゝるめて逢ことごけまでも者の方
で出来る間使て逢ゝト指数代ゝ一番浪で二あ把出
組合高めて母へサア佐さんよく決て出〳〵アイちつまやアト

常人金成の世人さ指めくさ方ゝ方。二三度佐ぷ川きく。
車ハ後をのかゝ〳〵ざゝ〳〵と入る〳〵〳〵二三日の
うちハ。お形こゞぜト笑を合て立あゞて。鼻頭ゝゝ入て出
て行ぞ。母ハ手紙をゝ送りて小あゝゆゝ〳〵金体お形ゞ
悪いゝる。十あまりの約のこ。ぱまり約朱ゞ大きゝらァ。
滅法界るゝ「アレサ方紙ゝゝ出て其〳〵佐ゝゝ。ゞ母ゞ
けゝ〳〵ゝとゝいふゝゝぶゝる母へ「ゝ彼男がゝ手紙るゝ紙金
のゝ。お前ハゝくハるゝ者へゞ彼男ハを言ゝ門と待て居る

伝右衛門
旅金を
責く
三両の
金を
貸ふ

拵るのだけは。全体為方がどうだ。本来いつまでもこうして居ると。世界の業らしい業じゃあるまいのサ。チャ左様さ。始めて安心。さ。文でやア構わめえ。左様ヨ。確かに為方がいるが。あつて。この左記を構ハねえと。居ても。ア。法として居るやうなものサ。文でも。天上のお為事で。活業をして居られるのだもの。左様いつまでも。状の人ゝ。文の。ゝ。為方。モウ。私の方の一件も。実ハ。彼人の言通り。九分九厘までハ。粗く。済て。居て。彼人が。居るのくらいそも。例も。聞かなかる。為方

さんハな。名ごろの。為方。為の。中ゝ。ア。人を。特人で。此方。此を。退屈。ア。ア。為ハ。左様。する。モウ。此。彼。見ス。くゝ。来る。乳。ひも。ア。ア。ア。ア。全体。私が。ア。ア。ア。ア

形しをせへ自己がちく〜紛うく〜と雑と落〜ヨト母子の器〜波
らへ行ふ水ちやロハ開く 時時は波面でこそへかはようこう
さて花ふ入けまべ毎度のとく動せくと入毒ら男の分
しふ。ふふ妻徒とよび合わまべハや橋やの突合ハこ尺
茅ハふ地を。後ふ来むが桜ての乱倍明暗あまべ
秋切多あ。吹入落あもあくねる通ふ紙ゆもあくる死
表ハこ年こ月廿六でも上やあら人ハ必と自慢ふ大分茅が
よく仏とこまて家が祐色所迄ハ其さ安面未橋を

執心ちがハと酒者定初ハ手腰ふ五の日ふ。解がまつれが
ぬをこ二年三年三法の曲張そ〜〜稽る京ふの制禁ふへ
強ぎ文句や制来ふ。その他一時の流行頃を洋づくるる
の疫ハあまで高尚千形る古風ハ至こ腰団の方こう
でしぐう天子の中の花姫とまこ〜ねべるこねといふも却むづかさ
世ふるこのこびやかこて何ふ玉ハ分の義絶行来といふ人ふ対
警流侍者ぐ来性ハ。元ふ氏こ〜のの〜ふ是で今ハ十絶ふ
俳細するハ表上を弘是ね正ふ右こさふぐあ〜く

玄徹しけるに其徒へ出てまつへ世不孫明
の受人こいちろ郎。警信伝者その罪をのぐるもの玄
ちく地不限是張るへ官人の威光為ふ仰ろ。ふくふ吏
ふ玄付ろく。伝者を捕へさせその罪を糺すべしと云けるに。
お毋ろのへ必ずふ收へで拾ろと涙ろつき体ふのて子
ろの多者ふ世ろ見ぬろ。ふ易きを敵伝者義しき罪ふ放
ぬ子ろお張来下さ是しと左へ表裏のその後世を
ろ鞍ろ是へ伝者ろふ行者ろ世ろ三けるとく人の成光ろ仰へ

神仏もまこと答ろきふ。石我の罪を完めけう。毒抗
髮結の伝者へ。ちむが方ろ三ふの合とだてふ收び。
心ふひろ友道成集ふ。泡まで酒をうち呑ひふろ。
猪特ふ義を門しく。公のまくふ拳動不どふ。かの合も
ちぬ。ふ知ふ二三日のそうちふ。まこと法合とも是把
べき。心ろくろふ御農へ代。義角して二日三日ろまと所ふ祝
しき友ろ甲乙が。二三人ほとそろくろ。ふ来きろ敬ろ
ふのち代を構ふてく。岳ろ分ろろを涙ふてく伝者ろ

ようと。青袖さゐの安つけて。今安蒙一き金をとりさしぎ板
と揃つて。同浴室へ。実家のことのふうり。揚屋いる揚屋とかへ
さんとて。昨夜ようしてきさゐの左袖を。ぬれ袖とぬめる
なり。若衆ようくなりて。ぬれ袖をしぼる。忽地線織ふるべー。ぬとも
早く身を濡せと。眉毛み蝋のつきーとふ。吟のごく周章
て。若れば。侍者ものて。ぬきぬぎ。神の器あて。面と掛ハを。
く。泥をてくきるれふ。侍を指するの。我のこめへ限らぬと。行
どて。左抜ふ蒙しきぞ。面いあを。早く身を濡さぬ。

ぬぎすてきめありと。ろふものう〜把持ぎ。網を意義
もわ〜さをぶ。そのもうきを。ぬて。まづ行方つる性
ぬきて。ろ葉すを。ぬいるー。まさ知已の方へゆきて。
きけば蒙ーき。侍後ゆく。人相恰好ものを。犯ー。
らるようをいるめぞ。侍者ますく。蒙き周章。行四方
とも。此形容でハそこの後さへ。乳づれーと。刺刀とりく
ふるくと。左袖を。ぬく。刺刀。ぬ。刺子。ぬ。袖を。指して。
ア。ぬをぬふくぬ。乳半ひるー。ぬ。ものう。侍さんも。忽地。孫

猪の坊さんとハ。ひゞけるへ。彩雲。夜の寒かへ。おゑぶ
珍今。をまさん。拍子附。分のうへ。きよ田舎ものゝ仕
ろと。小唄うゝふゝ。おやまき。何方もあく。ゆきを

第十四回

雪い繁毛ゆく。熱く。教孔一。人い。雑雲を。ろてうく。彼
ゆく。ちまい。ゆゝと。白雨易が。滑も。ろひ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
個ゝと。白雨易が。滑も。ろひ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

が孫らしへのへト表の方と向き大はるの賀で御祝さん行ごと早く
おとりナト云ども四三年ーお好い話出来く知へヨヤ行れり仕ヨ
一ー行れーくしどのよ四ヨ年ア仕ようへ十二時るうちやアあへヨ
大うこと御ごもーて張るごろう知へ丈でも祝さんい張よ実るある
るへ行ゲあるてもモウ丁度三年ぐらりみかるるへ知ア出つり
四年くらいよりあンア人の世張ふるるゲる此辺い彼人も変れり程
ごろくいけるいへ知へ丈でも根が丈丈ごろ〳〵初ひきえ
るるらう知へ十二時れでもるへるさ為次ゲ嫁よ出四人でる彼人が他へ

で生く十面寺ふと廊でまく十面ごろ〳〵濡り
るいハるへお茶まと電へ遠ハく行るのれ話来とう茶あく屋
丁度祝さんも門宝さんいあ知へ有れいく信ゑくこちへるへる
まくろち話も出来るへく十二お茶祝さん世へその気のく話へ
るへ御ア丈へ知へ話れ知へ行るで待くもごろ〳〵いふさごろ〳〵
困るハる。丈でもりくさ此ハ考見川さいりてるくるへく祝さんが
くるとアイ悪いと知りつくこ話とうちるめん
ごろくヤお若い行れくくさごろ。千歳の不居病る女ドやア

うつくしがと。石閾がつく張るうゝ匠ドやアるへゝ。おれ〻へちやアやア
お前ら者いヨ。泊板者人さいゝ。めちやア吳利ゝ。ハトゝ新へ
言とわけく入まゝ人今の時の孤次郎おろく重つさ。おま
こん嫁ふゆゝぶきゝ。へきろへおつゝ浪ゝこまへ支でも例も出業で
おめでゝ。へお前の殺へお出ざ。へすちまつくこれまでへこれ
まで。るへゝんぐ。先刻ゝゝおさんとお個でどんゝゝ葉ドて
指ゝゝイケ狂わへ。へゝおさん仕て吳わへ。此浪ゝゝ
おの一まへるゝも出来さのゝゝ和ゝわへゝ義遠ア通り私と

義て計ゝて指るヨ。へナニサ。此壌の方ゆやア。何ゆるへけヨど。ゆ
くゝお前様の方ゆ何ゝ出来さゝのゝゝあゝませゝゝ。へ
大不貞尾ざ。へゝ。ゆ義。女ハ女の景貞ゝゝ仕るへへゝおさん
へナニ日景貞ゝゝ解ゝやアるいがぞゝも私が者へてゝゝ。男不ど
浪浮ゝゝのゝゝいとゝゝのゝ。へゝそりやアゝ拭ゝ。そうゝゆも。
さんへゝ。浪浮の向面さヨ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
来ゝ。醫結さんの流人と口流ゝゝ。支が何様ゝ壌ゝゝ。
と。ゝゝ十ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

てもわれ不慈悲ごろう。彼「コレサモ私不届ゴ云私くめん
ごうも。是でも所ね死ろうふとい公者ゆ。一個や半分いるのサレ〳〵云
そうやかたのこそ。ゴ私ゴ不届ものハ今の代世界ゆあるア
あるまへとそうふゴるハ。彼「所が浮世ハ廣いのを「ヨヤく御方ア
私の所へこの事の薄のふ。夫婦喧嘩をしふ。おきみ
ごろう。若旦那ごろけるゴ。彼「ハ〳〵ちげ〳〵。エ御ゑん法私る姿を撮
あでもゴるこ。何ゆ不届ゴらく。私が一云いふと。ゴ云云云云
ゆと。ゴのこと云云
八云。九云十云で過とうゴ思うものヨれ〳〵。私ゴゆ御ゴ〳〵の

そのゆち
こゴいが置〳〵いろく〳〵いふ所へ書をあけく「ハイも洲トいひるゴ
ゴりち ゴろ
器物の中より。巻書と時計と出〳〵。一外国紙を巻て行ゴ「ヨヤ
あのひと
彼人。そうゆアる遠ひゴゆアゴのハコエ彼「ヨットよしく今私が紙ゴ
きゴ
来ゴゴ〳〵ヤゴ云れゴ〳〵お出ゴ〳〵。彼ふ「私の宅の人も出れゴ
ゴゴ
法ゴゴ気が利〳〵ゴ出るゴドレ夫ゴ〳〵お物をうけゆう。お御さん物
ゴゴ〳〵
紙ゴゆハ何知ゴく〳〵アレゴゴゆアゴ私が巻ヒョト見ゴゴ人ゴ所の
ゴゴ
何ゴゆまゴ知ゴ。ゴゴゴ〳〵ゴ渇宴ゆあり。程〳〵の新疾ふ出と稼と
ゴ知ゴゴ〳〵。彼〳〵ゴゴゴゴふゆ御さん。ゴ者もいろく〳〵ゴさんの方へゴ墨入と

同年あひのきむ
美婦乃舎合

抜くことさうぢゃ。玉へイヤ待ふ待ふ。それ
ぢゃ。へこそうぢゃ。蛇の道は蛇ぢゃ
ゐれへ。高実ろへ。早くお抜ゐると宜ゐ。玉へ。何抜いてくれる。
をるいるのヨ。玉へ。文でもお弟をつのりでぜさんもお千代さんと
別ることこいふ。ぜーぐこのヨ。玉へ。アそうやアるお千代さんが何ごろ
猫奔ゲあんことさうぢゃサ。玉へムを抜ゐれ。文ふても。先の女
房ぐこ抜ゐるくるやア。仔細ゐすーぐゐるれへ。早く抜いておまひナ
お弟の乳ゐも似合ゐの。何を便くくして抜ゐるこぐ。玉へ。私きも
早くこうこいけることぐ。お弟さんもゐるーー。十分で出さんの自性

みゐるくるのい。ぐうぐ。ぎゐうるこへ。玉へ。ナこ抜ゐるお弟さんが
何ところこうて。横ゐるのいわへ。早くお弟ゐるせへナ。玉へ。ぜさんもお弟
のるることこゐけく。お抜いお弟ぐ。文ゐるくるお弟ゐまるこ弟ゐで何と
こうふぐ。ゐるんぐ不弟弟ぐこうぐ。横いるのぐ私をのるるゐが出
来ぎうるゐんぐこゐへ。イヤサお抜ゐ。横ゐを抜ちやアのう抜へ自色と
ぜさんこゐ遠ふハた。自色へ知ってるゐうきひるの弟ゐぐこうた
抜ゐ抜れへハナ。玉へ。ゐんみ出さんるこやるお弟さんハ高実ゐう
抜ゐくこうるこぐう。でも抜ぎうるゐものぐこゐふけ出ぐ後ゐ抜

の往ぬいきうでみ。何ごろこれ居さへ一杯の今回来ろ
きうの。ちよ杯えりふ。お千代さんゲ病奔をして出さ解ろく、程のて。ぬ面を
えや
半く入まてコレ又ふと云わへど寄可笑くれへ一へまでもまぐお
ちよ
千代さんは 桃色でも居るのごらうとふヨセ一るゆふれ杯でも
あるまへどやうあいろを一十二信ことそまふ遠ひるのへヨ。今体まさんへ
ちよ
お千代さんは病きんく居さんごのヲ花へいく気角女といへ
どうる
やつ行杯ふ色せの中ごでも。是痛とえゆうさ一十二愛愛も
えんまみ
痛杯でもるのへゲまは遠ひるのへヨ一薄ひるきなをのちちへ

しごい　えんりよ
手ふ出さ恵るのく。まこ義兵の中まるまこ。自ろくるるる潤ろれうく落
ど　ごろり
ゲ尾ゲ義ゲ程と出けこ。すつく遠入る八百屋まこ電一ゆもかもゆこ
きへこ。イヤ孤さんお久へこう。お杯さんお物でゆ杯でごろうまこ一ヨヤ
お前杯ヲ泊らおきせごヨ出一桜ふ来てサま一ち杯ごらうく。
自己ゲ居杯へと思つく。愛くゲうふ悪くうちこうヲ杯ふ表でゆゆや
一こと云うごうお玉の例ふ居る桜一実ふモ一別ふ来ごる場合
せ紙一つま一いこきませまう。今日のこちふ郷くいてア行杯一く
お出ふすうこ杯一歩行く来つこのサま一ホイとまこ杯接ごうゆ

ちろごろふどん
を奥様人のにが多く和さめの怖まるる。彼さん「お松さんにも
あいご人ゆ多いるが白や芸義で。名ごろの交幕絶こい多いて
おるが「エ。お玉さん方人が出来ごと多くて稼く多くいひめを
うく豆ーやるいうちく「彼「多豆ーるか。こまうりア漢さが二個ふ
うくろく。モア云金でも頂れいぜ。今ままぢやアあ個こて。私一人
と和松めいぢゆこらう「「俗ろいぢゆこて稼る見でもある
まいるちく「「彼さんといちめくろいぢあれいろ多く芸が自ごが
と。ごうはの立
ゆとが強勢多くこそ世「「ゆや。宝ごろう。お多和も陽絶

お松松めごゆるる。お松さん私げ中さんのゆを多くこいるの
るる。和「ア多くいよ和ろ今まで和松の脱脱て若さろう世へ
いく会せ機のゆどのよさもずんと昔の流り頂ご「アるアア
くるまさんごお和大生多ゆ流よお和さすいこ。ゆ和八和
こくるいものごゆ「彼「ちゆいと私げ中を絶て云ますげモ。ます。
早くい濃蜜のと毛へ入ちゆアゆ和でごさいゆ世う。私も計四
毛おうのといあく入る稼りサ和「フニ広月のにりめッるゆうく「彼
ア。あの多りご和良金を虎ゆ多ちゆアゆ怪ハれいへ世へ名多虎げ

大きいこと〳〵はかりをもつて揚げさせ〳〵いけごまへと相手で
あまれあまれとする半〳〵コリヤ藤わ張ようこモウ豆加減わあんざけ
ひとりとも云へ半〳〵イヤ仏れもこそ知らぬ中こそ。ア物さる
玉一つ。お茶前後さんざ形角伝切のこと〳〵お吉みもる藤屋でも
あるこの。ほうこそこそこそこそ。ア物さんの世話ハ三筋ら手ものこと
こそ。ア物さんたの
表様云てお吉のさるのハ実ハ伝切でこざへ。ア物さんたの
一杯もる九ものこりハ酒ひ中こと〳〵そりやア豆そして法の二ものハ
何知で引かつて揚るま半〳〵化じやアれ〳〵おやもこそこそ

お千代の表金と老茶ハ吹ざらこと〳〵ひ情て指ること。何でも
この表面とするゆやア。何者を指て表ること。ちやアもられへ
と者地こその客人へ〳〵特んこさこそ。御る不何者ハ。ひこそ
風と金つく畑とこそこのサ風ところ畑とおこそ。ア物さんの指こそ
こそ表で老茶も生面表の客ゆざこと〳〵。表ざこそ。ア文の表ざこ。
何者の外に過りのこのこのぶ知ること。モウ〳〵文で一合二ものハ
この表ざこと〳〵。お千代とべけ者ハ〳〵田舎へ過〳〵そお吉こそ
せへと。こそ外半と手て老茶ゆここそここそここそ。ア物さんハ方の指こ

次第。いづれ道ゝうちのおあとと合て仕事の稽りサ後へ今うち
ゑど丈夫や家業の為さんの金も時と程度ざれへ。おあさんアおめで
とうお前さんぎア誠に美しいの。どひまりふあて。お前も
早く去れ。何ぞ。私の方へ来れば。仕事のの稽ごのう
後へ。丈夫のうまさん。私ゲ四三段で赤飯と汁やうこ石へ
げご。風の寒ゝれへうちゲいトどひちゝざる後ゝ神ゲ。金ふ
ちつて初めける。ひまのよう仕ゝ稽のち其き何ふまゝ。お
も仕ふ稽すり為て情めゲ後ゝ神ゲ。ゝまとうまゝ

め
ちまひ。お千代ゲ不義せーよ。其の面為ふもあるのるとべ。おあと
きゝくのちぎゝ早く後妻ふ迎へきゝるべーと。何ぞ云ーて云ふけとべ。また今ハ
せんなさ。と。うまんへ。ろろまんド。
後方ゝ。家も南も中ゝ私ゲ。ふふ何せ。ふるのハとろーく侍む
このゝ。孤ゝ。ゲゝ。お玉ハ姓も。堂ゝのゝ孤女のるすとべ。
すぐ。のちゝ。恋ゝ後孤ゝも。根ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
そのうくふゝ世界への孤ふハ行ふでも為ゝのふゝ。後ゝ
ハそのうとゝ。ゝ後ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

八13
4449
8

ひさうの引橋を。あハえの所を指て。ぴとり位の業なくて。万端たんぐ
ゆ事ゆ仕遂りあて。仏百とるき限を指とありけるとぞ。
羨むものさへまほろりなる

浪花手習記二編巻之中終